



小中一貫教育だより

学校教育課・教育センター版

平成29年7月28日 No.2

(小中一貫教育推進だよりから 通算No.73)

十日町市教育委員会学校教育課



弁当の日 ※裏表紙で説明

やらなければならないことはたくさんあるが・・・

子育て教育部長 渡辺 健一

ビデオは一家団らの様子を映し出していた。何やら話し合っている。

「必ず迎えに行くから」そうお父さん、お母さんが語りかけると、小学校高学年とおぼしき女の子の瞳から、大粒の涙があふれてきた。

決して、家族崩壊ドラマのワンシーンではない。その日の昼間。女の子は学校で「大地震が起こったら、家族の元へ帰るのではなく、まずみんなで津波から逃げなくてははいけません。お父さん、お母さんもみんなを迎えにくるのではなく、とにかく逃げなくてははいけません。そんな時のために、今夜、お家の人たちと、大地震の時の行動を話し合ってみてください」と課題を出されていた。それがくさんのシーンへとつながる。

これは「釜石の奇跡」と呼ばれ、防災教育の実践により子どもたちを自発的な避難行動に導いた、片田敏孝東京大学特任教授の講演会で拝見したVTRだ。「子どもさんにはちょっと気の毒だったかもしれない。でも、家族のためにきちんと話し合っておかなければならないことなんです」と片田教授は付け加えた。

一昔前まで、当市は「雪さえ降らなければ、自然災害のない住み良いところ」と言われていた。ところが、2004年の中越大震災を契機に、自然の歯車の噛み合わせが変わってしまった。繰り返される豪雪災害を除けば、それ以前の大きな自然災害は1964年の新潟地震。だから防災に対する教育を真正面から捉える機会はほとんどなかったに違いない。

ここに来て、首都直下型地震、南海トラフ地震、線状降水帯多発、スーパー台風出現など、きなくさい臭いが漂い始めている。幸い、当地では災害に関して現時点では平穏。ただ、平穏である今だからこそ、もう一度防災教育のあり方を考えるタイミングではないかと感じている。地震も大雨も台風も大雪も、災害は喉元を過ぎると熱さを忘れてしまう。それは人間の特性でもあり欠点でもあるからだ。

片田教授は講演会の最後をこう締めくくった。「その日、何人かの子どもたちはたまたま学校を休んで自宅にいて、津波に飲みこまれました。だから奇跡でもなんでもありません。一人として亡くなる子どもがでてはいけません。それができなかったことが悔やまれてなりません。」

市教育の重点 不登校の減少をめざして ～「不登校対策研修会」～

十日町市では、学校教育の最重要課題として「不登校の減少」を挙げています。平成28年度末の結果、市全体の不登校児童生徒数が少し減少したものの、発生率は依然として高い状況にあります。しかし、各校の不登校対策に向けた取組や関係機関との連携等により「全欠者が登校復帰を始めた」「新たな不登校発生がいなくなった、減った」「欠席日数が減った」という声から成果も少し見えてきていますが、一層不登校対策に向け力を入れて取り組む必要があります。

市教育センターでは、今年度、神村栄一新潟大学教職大学院教授を講師に研修会を年3回実施します。5月31日（水）には、市内全小中学校担当者及び関係者44人が一堂に会し、第1回目となる不登校対策研修会を実施しました。「不登校・不登校傾向の現状、不登校対策における効果的な取組や課題」と題したレポートを各校が持ち寄りました。①代表校による取組発表、②神村教授からの指導、③グループ協議を通して、次のポイントが明らかになってきました。

- 不登校を減らすには、長期化した事例への介入より未然防止が有効である。「不登校が減った学校」とは、「不登校の新規出現抑止に成功した学校」である。
- 不登校の新規出現抑止を果たしていくためには、「不登校リスク」（不登校のなりやすさを予測する特性や事情）の状況把握と早期の予測対応への取組、登校の敷居が高くない手だてが重要である。
- 不登校リスクを事前に把握した未然防止が、万一その子が不調になった際の支援の速やかな対応のための準備にもなる。突如発生にもあわてず対応できる。

小中一貫新潟県連絡協議会研修会開催

6月29日（木）、千手中央コミュニティセンターで小中一貫教育新潟県連絡協議会総会・研修会が開催されました。研修会には県内から約90人の教職員や教育委員会関係者が参加。初めに、田上町と十日町市の実践発表が行われ、その後、文科省教育制度改革室の大類由紀子室長補佐による講演が行われました。

「小中一貫教育について考える」と題した大類講師の講演では、小中一貫教育が求められている



理由として、授業時数の増加による教育の質・量の充実や、中1ギャップへの対応、共働きや父子母子世帯の増加がもたらす家庭における教育力低下、学校や教員の役割の変化などが、背景にあると説明されました。このほか、小中一貫教育制度の内容や全国での導入状況、成果と事例が発表されました。成果・事例では、小中一貫教育導入により学力の向上や中1ギャップの緩和、教員間で協力して指導する意識の向上がある一方で、教職員の負担感や打ち合わせ時間の確保などの課題もあるとし、取り組みの工夫について説明がありました。

エキスパート教員研修 ～南中・松井教諭から「中1」を学ぶ！

6月15日（木）、南中の松井晃一教諭から、「中学校1年生導入期における学年・学級経営の在り方」をテーマに、エキスパート教員研修会を実施しました。本研修は、本来授業を伴う形式でしたが、当市の重点課題である「不登校の減少」に向けた中1ギャップへの対策として、実施しました。

参加した教職員からは、「子どもとのかかわり方を改めて考えさせられました。4月から、自分なりに話しかけたり、関係を持ったりしてきましたが、今回、たくさんの先生方の考えやアイデアを聞いて、まだまだやれることがたくさんありました。明日からの授業や生活に生かしていきたいです。」との声が聞かれました。

松井教諭から提供していただいた資料は、「職責別→01_学校間共通→13_エキスパート教員研修→H290615南中・松井教諭」フォルダ内に保管してあります。南中生徒の情報が入っておりますので、取扱いに注意した上で、校内の研修等に役立ててください。



フロに学ぶ～授業力向上研修Part 1 「道徳科」を学ぶ！

6月20日（火）、田沢小学校を会場に、筑波大附属小学校の山田 誠先生をお招きし、「特別の教科 道徳」の示範授業（6年生）と講演会を実施しました。

ご存じのとおり、来年度から小学校で「特別の教科 道徳」が始まります。それに先立ち、「問題解決的な道徳授業」を、近隣市町村を含め102人の教職員が学びました。

「様々な授業例、発問を教えていただき参考になりました。一つの方策だけでなく、いろいろ知ることができてよかったです。授業については、子どもたちの意見から二つの意見をつくり出し、選ばせること、そして、選ぶときも3段階に分けて選ばせることがとても勉強になりました。」

「教材の選び方の大切さを学びました。教科化になるにあたり、不安なこともありましたが、少しすっきりしました。特に、普段の行動と道徳の時間のコメントが合っていない子どもの評価について学びました。」

感想から、参観者はそれぞれの視点からの学びがありました。学んだことを、ぜひ、自校に持ち帰り、役立ててください。

中学校放課後寺子屋塾スタート！

7月10日の南中を皮切りに、吉田中、中里中で中学校放課後寺子屋塾が開塾しました。あと7校については、2学期からのスタートになります。

中学校においては、各校の実態、要望に応じて、時期、教科や学年などが異なります。また、各生徒の目的も中3であれば



高校入試などもあるので様々です。各校におかれては、個々の生徒への励まし、必要に応じ講師との情報交換を取っていただき、生徒にとって価値のある時間にしていただければ幸いです。

ふるさと信濃川教室 ～「ふるさと十日町」の魅力を満喫～

今年度は、ふれあいの丘
中学部の生徒も参加したふるさと信濃川教室。大雨の影響で実施できなかった学校、プログラムについては、2学期に実施できるよう、今後日程調整を行います。よろしくお祈りいたします。



学校教育課・教育センター事業のお知らせ ～8・9月～

日程	内容【会場】	備考
8月3日(木) ～4日(金)	イングリッシュキャンプ 【千手コミセン、三省ハウス】	市内小学5・6年生、中学生
8月4日(金)	小中一貫教育中学校区教職員研修会(悉皆) 【市民会館】	静岡県袋井中学校の高橋壮臣教諭を講師に講演
8月5日(土) 19日(土) 26日(土)	土曜日英会話寺小屋塾 【中央公民館、千手コミセン】	市内小学5・6年生、中学生
8月7日(月) 8日(火) 21日(月) 22日(火)	英語ボランティアガイド養成講座【十日町小】	市内中学生5人、市内高校生5人(7月31日～)
8月9日(水)	事務職員研修【まつのやま学園】	郡市小・中・特支学校事務職員が対象
8月21日(月)	特別支援教育研修講座【川西庁舎】	参加登録の教職員
8月23日(水)	初任者研修【特別養護老人ホーム三好園】	市内初任者10人
8月24日(木)	特別支援教育研修講座(公開講座) 【千手コミセン】	新潟大学長澤正樹教授を講師に講演。
	英語・外国語活動指導力養成講座の事前研修 【川治小】	小学校教員、中学校英語科教員(悉皆)
～8月28日(水)	中学校区統括コーディネーター連絡会【9中学校区】	7月24日～

このほかに、市教委計画訪問は計画に従い実施します。

【表紙の説明】

まつのやま学園で行われている「弁当の日」。小学5年生から中学3年生までの児童生徒が、自宅で作ってきた弁当を持ち寄り、一緒に食べて交流します。